みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

マダガスカルのオーストロネシア系魚名

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崎山, 理 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000947

飯田卓編『マダガスカル地域文化の動態』
国立民族学博物館調査報告　103:209-240(2012)

第9章　マダガスカルのオーストロネシア系魚名

崎山　理
国立民族学博物館 名誉教授

本稿はオーストロネシア語族における魚種の名称がマダガスカルでいかに維持され，また意味変化しているかを比較言語学・言語人類学的に考察した。マダガスカルの民族はインドネシアのカリマンタン島をもっとも古い故地とすることは既に知られているが，魚名についてもカリマンタン島を含むジャワ海周辺の島々（ヌサンタラ）の言語との対応例が多いことを明らかにし，そのレベルをヌサンタラ祖語形として再構成した。また魚種についても，カリマンタン島は河川湖沼が多く，元来，淡水漁業が盛んであったことを裏付けるかのように，淡水魚名がマダガスカルで淡水魚のほか海水魚に意味変化している事例を見出した。なお，マダガスカル南西部を中心に広域で用いられる魚の総称 fia/fiana はヌサンタラ祖語形の *piyam コイ科レプトバルブス属の一種が一般化した名称である。

1　はじめに
2　オーストロネシア系魚名リスト
　　―― 海水魚を中心に
3　淡水魚 ―― カワスズメ科ほか
4　その他の水生動物
5　むすび

＊キーワード：オーストロネシア語族，ヌサンタラ祖語形，マダガスカル語，カリマンタン島，淡水魚，カワスズメ科，意味変化

1　はじめに

オーストロネシア比較言語学は，その方法論と語彙の再構成ともに O. Dempwolff の先駆的研究に負うところが大きいが，その祖語形リスト（D：Dempwolff 1938）は語彙数と語彙の意味的確定をその後の資料によって補わなければならない点が多く，また語彙項目についても，Dempwolff 以降，かなり精密な研究が行われるようになった。とくに意味論的に閉じた系をなすような生物界では，日常的に人との関わりが深い植物や魚類などについて，より細かな比較と祖語形の再構成ができるようになってきた。魚名については，すでに崎山（1980）がある。ただし，その時点では Malagasy（MLG：マダガスカル語）のデータが揃っていなかったため考察には含まれていない。この論考のタイトルでオーストロネシア民族としたのは，オーストネシア諸語を話す民族集団の意味である。本稿では魚類の名称を研究対象とし，fiam-potsy「白い魚＝クロサギ科ツッパリサギ（*Gerres acinaces*）」，fia-mena「赤い魚＝フエダイ科フエダイ属（*Lutjanus* spp.）」（いずれも Betsimisaraka 方言）などのような複合語は原則として対象外とする。オーストロネシア語族の魚名の比較研究には，最近では（G：Geraghty 1994）がある

が，この研究はタイトルのとおりオセアニアの局地的祖語形が大半を占め，オーストロネシア（マライ・ポリネシア）祖語形はほとんど示されていない。また（Z : Zorc 1995）は，二十数語の魚名を含む祖語形を示し，オーストロネシア祖語形（PAN），マライ・ポリネシア祖語形（PMP），西部マライ・ポリネシア（旧称，ヘスペロネシア）祖語形（PHN）などのような区別を設ける。ただし，PHN と称するもののフィリピン諸語の比較に偏って再構成されているため，遺憾ながら，同じ PHN に属するインドネシア諸語はもとよりマダガスカル諸方言の説明にも大仰‘awful’な祖語形が多い。

オーストロネシア語族という概念は，台湾諸語を比較に含む場合で，台湾諸語を含まない場合は，マライ・ポリネシア語派というのが最近の傾向である。本稿は，マライ・ポリネシア語派の比較を中心とした内容であることをお断りする。MLG は系統的にカリマンタン島の東部バリト語群に分類され，Ma’anyan（マアニャン語）ともっとも近い関係にあるとされる（Dahl 1951）。魚名の比較からは，マライ・ポリネシア語派の下位のレベル，そして大バリト祖語形の上位レベルの「ヌサンタラ祖語形」（Proto Nusantaran）が多く認められ，魚名の祖語形の後に（PNN）と示す。これは本稿で始めて提唱するレベルである。

「魚」はマダガスカル南西部方言（Sakalava 南部，Vezo, Antandroy, Antanosy, Bara）で fia/fiana といわれるが（Ki : Kiener 1961, E : Elli 1988），PMP *ikan（D），PAN *Si-káʔen（Z）「魚」からはその変化を説明できない。ただし，音韻変化およびその故地から判断してカリマンタン島の東・西部で淡水魚のコイ科バルブス亜科レプトバルブス属の一種（*Leptobarbus melanotaenia*）を指す piam（SD : Schuster and Djajadiredja 1951, Bu : Butler 1994–2006 ）に語源の可能性があり，PNN *piyam からマダガスカルで意味が一般化したと考えられる。レプトバルブス属のメラノタエニア種はカリマンタンにのみ生息する（Kottelat *et al.* 1993）ことは民族のもっとも古い故地として注目される（図 1 参照）。このような意味的一般化は，新潟県の一部でサケがウオ，イオと呼ばるような類例にもみられる（高木 1970）。

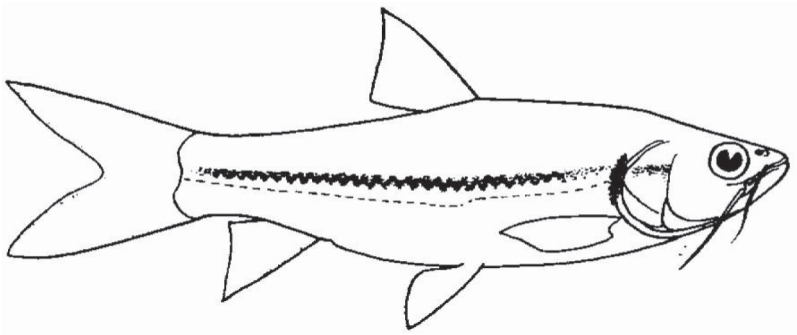

図 1　Leptobarbus melanotaenia（Inger and Chin 1962から引用）

レプトバルブス属は体長50センチになり，ナギナタナマズ科ノトプテルス属（*Notopterus* spp.），バルブス亜科プンティウス属の一種（*Puntius schwanefeldi*），コイ亜科シンニクシス属（*Thynnichthys*），パンガシウス科パンガシウス属（カイヤンを含む）（*Pangasius* spp.）などとともに，現在もカリマンタン島東部における年間を通じて漁獲量の多い淡水魚種である（MacKinnon *et al.* 1996）。

現在，マダガスカルで魚の総称として南西部方言の fia/fiana が広く一般に通用するものの地域による違いもみられ，北西部方言（Sakalava 北部，Antankarana）・南東部方言（Antaimoro, Antaisaka）で filao，中央高地方言（Merina, Betsileo）では trondro という（Ki）。ただし，Nosy Be を中心とした Sakalava 方言の北部では filó, Ikongo の Tanala 方言では fia/fiaña が「魚の一種」を指す（TF：Thomas-Fattier 1982, Be：Beaujard 1998）。filao は fia-laoka「おかずになる魚」に由来する。また東部の Betsimisaraka 方言では魚を単に laoka, laokan-drano「おかず，水のおかず」というが，laoka は PMP *lahuk（D）「おかず」が語源である。Merina 方言では魚は trondro のほか hazan-drano「水の獲物」と複合語でいわれ，基礎語彙でもある魚の語源がこのように維持されないのは，日本語の東日本から広がったサカナ「酒菜」の場合と同じである。ただし，trondro の語源は明らかでない。

言語系統的に関係の深い Ma’anyan の kɛnah「魚」（その他，Ma’anyan と近縁の言語 Dusun, Paku, Simihim（Hu：Hudson 1967）も同じ言葉）を語源とする言葉は，マダガスカルの大部分の地域で hena「食肉」へと意味変化した。古 Sakalava 方言にはまだ魚の意味があったとされるが（Dahl 1951），Tanala 方言の hèna には「魚」の原義が残る（Be）。しかし，Betsimisaraka 方言には hena が複合語として残り，特定の魚名を指す例がある。hena-lahy でボラ（zompona）のことをいい（Ki），-lahy は「男」を意味する。また hena-laza はカレイ目カレイ亜目ウシノシタ上科ササウシノシタ科ミナミウシノシタ属の一種（*Pardachirus marmoratus*）を意味する（BB：Bauchot et Bianchi 1984）。後部要素の -laza は「名高い」の意味であるが，語形成の過程は不明である。なお，Sakalava 方言ではウシノシタ上科，カレイ上科などを含むカレイ亜目（Pleuronectoidei）を fan-demba「沈んだもの」といい（Ki），Vezo 方言では fan-demba はウシノシタ上科に含まれるウシノシタ科（Cynoglossidae）を指す（BB）ような違いがみられる。ただし，カレイ目は半身の魚とみなされ，地域によってはタブー視されて漁師は捕まえない（P：Petit 1930）。なお，Malay でもカレイ目は ikan sebelah または sebelah「片身の魚」という。

文献，表記，略号について短く説明する。（SD）は魚名を島名（地域名）で示す一方，言語名が不明の場合が多いが，島名をそのまま引用する。同書のボルネオ（＝カリマンタン），セレベス（＝スラウェシ）も旧称のままとする。アンボン，セラム，サパルアはマルク諸島の島名である。ただし，言語名が記されている場合，表記は現代マレー語統

一方式に改める。また南セレベスの Makasar に対し（C：Cense 1979）により識別可能な語について（SD）を補正し，（C）の語末の声門閉鎖音 ’（アポストロフィ）は q に置き換える。なお，フィリピンの Cebuano は，（HU：Herre and Umali 1948, Sch：Schroeder 1980）では Visayan という言語名で引用されている。

マダガスカルの言語（方言）名については，以下のような略号（またはそのまま）を用いる。MLG は Merina 方言をもとに形成されたマダガスカルの公用語である。Dempwolff は Hova という名称を用いるが不適切である。本稿で扱った方言のうち，Antaimoro は（Taim），Antandroy は（Tandr），Antankarana は（Tank），Antanosy は（Tano），Bara は（Bara），Betsileo は（Betsil），Betsimisaraka は（Betsim），Mikea は（Mikea），Sakalava は（Saka），Sihanaka は（Siha），Tanala は（Tana），Vezo は（Vezo）と略記するかそのままとする。

本稿の祖語形の表記では，Dempwolff の再構成音の一部を Dyen 方式（Dyen 1971）に書き改め，また祖語形の e は [ə] を表す。マダガスカルでは正書法の ng は一般に [ŋg] と発音されるが，Vezo 方言，Sakalava 方言などを除く方言では [ŋ] は音素とならない。マダガスカルの正書法では語末の -y は [i]，o はすべて [u] と発音される。また正書法の tr, dr はそり舌音の [t], [d] を表す。各引用言語の表記は原文のままとする。なお，本文中の＞ は「変化する」，：（コロン）は「対応する」，／（半角スラッシュ）は「あるいは」，祖語形の（　）は二者択一，［　］は未確定，各語例の（　）は祖語形（語源）と無関係の部分であること（前鼻音化付きの接頭辞 a- を含む），学名の＝はシノニムを表す。著者による祖語形およびすでに発表された祖語形への修正形はボールド体，これまでに発表された祖語形でマダガスカル形を含んでいないものへのマダガスカル形もボールド体で示す。

2　オーストロネシア系魚名リスト —— 海水魚を中心に

Dempwolf があげる比較語彙項目のうち，MLG を含む魚名は次の例に留まる。

*ki[y]u/*qi[y]u（D）/*qiSu（B：Blust 1980; 1984–1985）（Z：PAN）サメ類＞ iu/yu（Malay）（M：Maxwell 1921, Sco：Scott 1959）サメ (a-)kiho/(a-)kio（MLG）（BB）サメ：(an-)kiho（Saka：Vezo）（Ki）サメ。

*paRi（D）エイ目（Rajiformes）/*vai（フィジ祖語形・ポリネシア祖語形）（G）トビエイ（Myliobatidae）/paRis（Z：PAN）‘stingray’＞ pari（Malay）（M, Sco）エイ：pagi（Tagalog）（HU）エイ：fay（MLG）エイ。

Flacourt（1658）は faye‘raye’と記し，(P) はマダガスカルで種類が多いという。

*[t]u[n]a（D）/*tuna（フィジ祖語形・ポリネシア祖語形）（G）ウナギ目ウナギ亜目ウナ

ギ科（Anguillidae）/*tuNa（Z：PAN）‘fresh water eel’/***tunaŋ**/***cunaŋ**（by-form）ウナギ目（Anguilliformes）の種類＞ tunang/tonang（Javanese）（SD）: cunang（西ジャワ）（SD）ウナギ目アナゴ亜目ハモ科ハモ属の一種（*Muraenesox talabon*）・アナゴ亜目ウミヘビ科ウミヘビ属（*Ophichthus* spp.）: tona/dona（MLG）オオウナギ（*Anguilla mauritiana*＝*A. marmorata*），大ヘビの一種：tona（Taim）（Ki）オオウナギ：toŋa（Saka）（TF）ウナギ /(l)ona（Saka）（Ki）ウナギ属。

（Z）はウナギを淡水性と海水性に分け，*tuNa を淡水性，*aRemaŋ（PHN）を海水性として区別するが，*aRemaŋ はマダガスカルには伝わらない。ウナギ科でなくウナギ目を意味する ***tunaŋ** は，西部マライ・ポリネシア語派よりもオセアニア諸語に分布が広い。マダガスカルでは祖先（民族名不明）の化身としてウナギは食用にされない（Abinal et Malzac 1888）。ただし，Betsimisaraka と Tanala の女性が妊娠中にウナギを食べないのは，胎児がぬるぬるになり流産すると信じられているからである（Ruud 1960）。Merina ではウナギが大いに賞味され，とくに内陸部で捕れる 1 メートル半以上の大ウナギは tona と呼ばれ燻製にして王族に献上された（Boissard 1983）。また比喩的に，ウナギは Betsileo 地方に生息する大ヘビに意味変化する（Richardson 1885）。しかし，ヘビが原義ではないから Richardson の説明は逆である。琉球列島のハブがハモと同じ語源といわれることがあるがあり得ないことではない。フランス語のウナギ ‘anguille’（イタリア語‘anguilla’）はラテン語のヘビ‘anguis’に指小辞が付いた形が語源であることはよく知られている。ただし，現在，マダガスカルでウナギをいうのは amalona が一般的である。Sakalava 方言ではウナギを amaluŋu（TF）ともいうが，toŋa/(l)ona との種の違いは明らかでない。なお，33）***maluŋ** を参照。

以下に海水魚，淡水魚として従来の祖語形の再考と新たな祖語形を提示する。

01）*baDe[r]（D）「魚名」/***baDa[r]**（PNN）コイ科バルブス亜科プンティウス属（*Puntius* spp.）＞ baDer（Javanese）: balar（西ジャワ）プンティウス属の一種（*P.* sp.）: badir（Madura）プンティウス属・テンジクダイ科テンジクダイ属アポゴンメラノプス（*Apogon melanopus*）: badar（Geser, マルク）（SD）ベラ科カンムリベラ亜科キュウセン属の一種（*Halichoeres centriquadrus*）: **vara-vara**（Betsim）（BB）フエダイ科ゴマフエダイ（*Lutjanus argentimaculatus*）: **vara-vara**（Betsim: Tandro: Vezo）（Ki）フエダイ科・フエフキダイ科（Lutjanidae/Lethrinidae）。

インドネシアにおいて淡水魚（コイ科）と海水魚（テンジクダイ科・ベラ科）に分かれるが，マダガスカルでは海水魚に変化した。

02）*bakuku（B1980）presumably ‘sea-bream’/（Z：PHN）ナンヨウチヌ‘*Sparus*

berda'/***bakukuŋ** タイ科（Sparidae）の種類＞ bekukong（Malay）(Sco）タイ科ヘダイ亜科クロダイ属の一種（*S. hasta*＝*Acanthopagrus hasta*): bekukung（西ジャワ）(SD): bakukung（Makasar, 南セレベス）(C）クロダイ属ナンヨウチヌ（*S. berda*＝*A. berda*): bekuku (Javanese) (SD) マツダイ科マツダイ属マツダイ（*Lobotes surinamensis*): bakuku（Bajo, 南セレベス）(SD）スダレダイ科スダレダイ属ユウダチスダレダイ（*Drepane punctata*): bakuko（Bajo, マルク）(S：崎山フィールドノート）クロダイ属キチヌ （*A. latus*): bakoko（Tagalog）(HU, Sch）イサキ科（Pomadasidae＝Haemulidae）・シマイサキ科（Theraponidae）・タイ科（Sparidae）の一種: bakoko（Bikol）(HU）ナンヨウチヌ: bikoko（Pangasinan）(HU）タイ科: **vahoho**（Vezo）(I：飯田 2008）ナンヨウチヌ /**vahoho**（Tank：Tano：Vezo）(Ki, BB）ヘダイ亜科ヘダイ属ヘダイ（*Rhabdosargus sarba*＝*S. sarba*）。

（Z）は祖語形の意味をナンヨウチヌに特化するが，フィリピンの同じ科でも多様な魚種を表すことを見ても妥当な意味設定ではない。

03）***baŋku/*baŋu**（by-form）(PNN）アナゴ亜目ウミヘビ科ウミヘビ属（*Ophichthus* spp.）＞ bangko（西ジャワ）(SD）ウミヘビ属の一種（*O. apicalis*): vano-vano（Betsim）(P）ウミヘビ属の一種（*O.* sp.)/vano-vano（Betsim）(Ki）ハゼ科ワラスボ亜科チワラスボ属の一種（*Taenioides* sp.)。

Betsimisaraka 方言で vano-vano は（P）と（Ki）で指す魚種が異なる。vano-vano は両者を含むのか，Betsimisaraka 方言内における変種か不明である。チワラスボのウナギのような細長い体形は意味変化への契機となる。なお，（Ki）の整理番号99チワラスボの図版には違った魚種が掲げられている。

04）***baŋlus/***baŋus（Zorc and Charles 1971）'unidentified fish'/***baŋus**（by-from）ネズミギス目サバヒー科サバヒー（*Chanos chanos*）＞ baulu/bolu（Bugis, 南セレベス): bolu（Makasar, 南セレベス）(SD, C）サバヒー: banglos/banglis/bangos (Tagalog): banglus /bangrus/bangus (Bikol): bangilis (Marinao : Samal : Taosug) : banglos/bangot（Ilokano): banglus/ banglis/bangros/bango（Visayan）(HU）サバヒー：vango（Saka）(BB): vango（MLG）(Ki）サバヒー（*C. salmoneus*＝*C. chanos*）。

Blust はサバヒー 'milkfish' に対し *qawaʔ（B1980; 1984–1985）(Z：PMP)/*qawan（B1986）を再構成するが，その意味を維持するのは agwa（Chamorro): awa（Visayan):

yawa（Fijian）などで，この形はマダガスカル形と関係ない。むしろ，Tagalog にみられるような bangos（幼魚）: sabalo（成魚）の区別（Sch）が存在したと考えるべきであろう。ただし，Zorc and Charles（1971）の *baŋus はフィリピン祖語形として立てられている。なお，マダガスカルでは MLG で語中の *-ŋ- は -n- になるが，Sakalava 方言では *taŋan「手」＞ tanana（MLG）: taŋana「手」のように [-ŋ-/-ŋg-] に変化する（TF）。vango はサバヒーに対するマダガスカルの一般的呼称といわれるが（Ki），それは Sakalava 方言から広がったことになる。

05）***barunaŋ**（PNN）アイゴ科アイゴ属（*Siganus* spp.）＞ barona（Buton : Muna, 南セレベス）（SD）: baronang（Makasar : Bugis, 南セレベス）（SD, C）: beronang（西ジャワ）（SD）アイゴ属 : (ãm-)búra(-másake)（Vezo）（Ko : Koechlin 1975）アイゴ属の一種（*S.* sp.）/(am-)bora(-masake)（Vezo）（S, I）/mora(-masaka)（Vezo）（BB）アイゴ属シューメイカースパインフット（*S. sutor*）: mora(-masaka)（Saka : Vezo）（BB）ハナアイゴ（*S. argenteus*）。

Vezo 方言の am- は接頭辞 a- の鼻音前出を伴う顕在形，また Sakalava 方言の m- は am- の前母音代償化を含む潜在形である。後部要素の -masaka/-masake は「熟れた」の意味であるが，複合語形成の過程は不明。なお，25）***ki(n)taŋ** を参照。

06）***bawuŋ**（PNN）ギギ科（Bagridae）の種類＞ baung/bawon（西ジャワ・西ボルネオ・南ボルネオ）（SD）ギギ亜科ヘミバグルス属（*Macrones* spp.＝*Hemibagrus* spp.）: baung（Malay : Orang Sungei, 北ボルネオ）（IC : Inger and Chin 1962）ギギ亜科ミストゥス属（*Mystus* spp.）/baung（Malay）（Bu）ヘミバグルスネムルス（レッドテールキャット）・ミストゥスビタートゥス（ストライプドワーフキャットフィッシュ）（*H. nemurus/M. vittatus* : baung（Ngaju-Dayak）（Ha : Hardeland 1859）「淡水魚の一種」: ßa’uŋ/ßauŋ（Ma’anyan : Dusun : Paku）（Hu）‘catfish’ : baung（Iban）（R : Richards 1981）ナマズ科ワラゴ属の一種（*Wallago* sp.）: baong（Bidayuh, サラワク）（N : Nais 1988）ヘミバグルス属の一種（*M.* sp.）: baong（南スマトラ）（SD）ヘミバグルスネムルス : vaona/vahona/vaho（Betsim）（Ki, BB）ハマギギ科ハマギギ属マダガスカルハマギギ（*Arius madagascariensis/A. polystaphylodon*）。

Betsimisaraka 方言の語中の -h- は不規則的な侵入音。ハマギギは海産のナマズ目であるが，淡水（汽水）域にも侵入する。なお，Sakalava 方言ではハマギギ属を gogo という。なお，21）***gaguk** を参照。

07）***besut**（PNN）キス科（Sillaginidae）の種類＞ besot（Javanese）（SD）（*sic*）キス属ホシギス（*Sillago maculata*）: (am-)boso（Betsim）（Ki, BB）モトギス（*S. sihama*）。

besot は Javanese ではなく Malay で，クラブフットシラゴ（*S. chondropus*）を指す（Academia Sinica 2010）。Javanese では bojor といい，rejun/rejung というシノニムもある。Betsimisaraka 形は前鼻音化を伴う接頭辞 a- を含む顕在形である。なお，15）***buzu[r]** を参照。

08）*bilis（B1970 : PAN）‘unidentified fish’／ニシン科（Clupeidae）の種類＞ bilis（Malay）（M, Sco）カタクチイワシ科インドアイノコイワシ属（*Stolephorus* spp.）: bilis（Ngaju-Dayak）（Ha）「小魚の一種」: bilis（Iban）（R）テリナゴ属ほか（*S.* and other spp.）: bilis（Tagalog）（HU）ニシン科の一種 : vily（Betsim）（Ki.）メラノタエニア科ベドティア亜科ベドティア属（マダガスカルレインボー）（*Bedotia* spp.）: vili(-mena)（Betsim）: vili(-vary)（Saka）（BB）ニシン科ギンイワシ亜科サウウァゲルラ属の一種（*Sauvagella madagascariensis* = *Spratelloides madagascariensis*）。

bilis は河口から淡水に入るものもあり，釣餌になる。ベドティア属，サウウァゲルラ属はともにマダガスカル固有の汽水から淡水域に生息する魚種である。前部要素の -mena は「赤い」，-vary は「米」の意味。（Ki）は vilivary（Betsim）をボウズハゼ亜科シキディウム属の一種（*Sicydium lagocephalum*）とする違いがある。また Betsimisaraka 北部方言の vidy をベドティア属でなくカワアナゴ科カワアナゴ亜科カワアナゴ属の一種（*Eleotris tohizonae*）と記す。なお，46）***tuguk**（2），56）***zaŋo** を参照。

09）***buku**（PNN）アジ科オニアジ属オニアジ（*Megalaspis cordyla*）＞ boko（Bajo, 南セレベス）（SD）: bokko（Bajau, 小スンダ）（V : Verheijen 1986）オニアジ : vohy（Vezo）（BB）サバ科スマ属スマ（*Euthynnus affinis*）。

vohy の末尾母音 -y は不規則で，-o となるのが規則的変化であるが，*-a ＞ -y に変化する例への「不正確な類推」‘irrige Analogien’（D）に基づくと考えられる。Flacourt（1658）は vohé‘bonite’と記す。

10）***bunduŋ**（PNN）コイ科バルブス亜科レプトバルブス属（*Leptobarbus* spp.）＞ bundung（南ボルネオ）（SD）レプトバルブス属 : vondro（MLG）（BB）タイ科マダ

イ亜科タイワンダイ属（*Argyrops* spp.）。

レプトバルブスはボルネオ，マレーシア，タイを原生地とする淡水魚であるが，マダガスカルでは科の異なる海水魚へと意味変化した。なお，32）***makaluw**，54）***piyam** を参照。

11）***buŋka**（PNN）スダレダイ科ユウダチスダレダイ（*Drepane punctata*）＞ bongko（中部ジャワ）（SD）ユウダチスダレダイ : (ba-)boka（Vezo）（BB）ユウダチスダレダイ : babo（Saka）（BB）/(ba-)boka（Saka）（P）ユウダチスダレダイ。

ダガスカル形は前鼻音化を伴う ***bam-buŋka** に由来する。*ba- はオーストロネシア語族系の「化石化」した接頭辞とされる（Dahl 1951）。規則的には *b は v に変化するからである。Merina 方言には ba-lelaka/lelaka「目玉の大きい」ほかの類例がある。なお，47）***tula** も参照。バントゥ語族系の複数名詞のクラス接頭辞 ba- とは機能が異なる。Sakalava 方言の babo は語末の -ka を異分析によって落した形である。南セレベスの Bajo では02）*bakuku によってユウダチスダレダイを意味するような変化が起っている。

12）***bu(ŋ)kalaŋ**（PNN）ベラ科（Labridae）の種類＞ bukkalang（Bajau, 小スンダ）（V）タキベラ亜科タキベラ属キツネベラ（*Bodianus bilunulatus*）/bukkalang（Bajau, 小スンダ）（V）カンムリベラ亜科カンムリベラ属タレクチベラ（*Hemigymnus melapterus*）: bukalang（Bajo, マルク）（S）ベラ科の一種 : bokalana（Betsim）（BB）カライワシ目イセゴイ科イセゴイ属イセゴイ（*Megalops cyprinoids*）。

イセゴイは海水域から汽水域にも入るが，魚肉に特有の臭みがあり不味とされる。マダガスカルではカライワシ目は多く見られ，Nosy Be, Mahajanga の沿岸のほか，河川，湖でも捕れる（P）。ベラから変化した理由は明らかでないが（インドネシアの分布も Bajau/Bajo に偏っている），Betsimisaraka 形は前鼻音化を伴う接頭辞 ***am-buŋkalaŋ** からの規則的な変化で鼻音代償を含む潜在形である。

13）***bu(n)tal**（PNN）フグ目（Tetradontiformes）の種類＞ buntal（Malaly）（M, Sco）ハコフグ科（Ostraciontidae）・フグ科（Tetraodontidae）・ハリセンボン科（Diodontidae）の種類 : buntal（Malay, 北ボルネオ）（IC）淡水フグ属（*Tetraodon* spp.）: bʊntana（Ma'anyan : Dusun : Paku）（Hu）: bʊntal（Simihim）（Hu）'blowfish' : buntal（Ngaju-Dayak）（Ha）「軟骨魚の一種」: buntal（Iban）（R）フグ属その他（*T.*

and other spp.): buntala/buntalaq（Makasar, 南セレベス）(SD, C）ハコフグ属の一種・ネズミフグ（*Ostracion cornutus/Diodon hystrix*): botàña（Vezo）(I）モヨウフグ属（*Arothron* spp.): bontana（Betsim）(Ki）モヨウフグ属：vontana（Saka）（S）モヨウフグ属。

マダガスカル形の語末は，*gatel「かゆい」＞ hatina（MLG）「かゆみ，疥癬」のように *-l が -na に変化し Dempwolff の分類では第 2 グループに属する。 また Vezo, Betsimisaraka 方言形は接頭辞 a- に前鼻音化を伴った ***am-butal** に由来する潜在形である。

14）***bunti** ボラ属（Mugil spp.）ボラ科＞ bonti/bunti（Bugis, 南セレベス）(SD）オニボラ属オニボラ（*Mugil vaigiensis*＝*Liza vaigiensis*): wonti (Bajo : Muna : Buton, 南セレベス）(SD）メナダ属コボラ（*M. troscheli*＝*Liza macrolepis*）: bonté/(be-)bunté（Bajau, 小スンダ）(V）ワニグチボラ属ワニグチボラ（*M. labiosus*＝*Oedalechilus labiosus*): bonté（Bajo, マルク）(S）ボラ属：bli(-lch) (Palauan）(HR：Helfman and Randall 1973）フウライボラ属フウライボラ（*Crenimugil crenilabis*): (am-)bontsy（Betsim）(BB）ベラ科カマスベラ属カマスベラ（*Cheilio inermis*）。

フィリピンの淡水魚にも bunti オニボラが報告されているが（Bu）， 言語名は不明。ボラ属に対しては *balanak（D）(Z：PHN）という形も再構成される。しかし，正確には古い接中辞 -al- が含まれる *b(al)anak で belanak（Malay）(M）ボラ科（Mugilidae): balana/balanaq（Makasar, 南セレベス）(SD, C）オニボラ（*M. vaigiensis*): banak（Tagalog：Bikol：Marinao：Samal：Visayan）(HU): balanak（Pangasinan）(HU）と変化し，（D, Z）の形には不備がある。ただし，*b(al)anak はマダガスカルには伝わらない。ボラに対しこのように祖語形で変種が存在した。これは種レベルの区別であったのか，現在，正確なことは分からない。 ボラは Malay 系の ***zumpul** に対し， この ***bunti** はスラウェシから東インドネシアを中心に分布する。またセレベスでは bonti の重複形 bonti-bonti が淡水魚のテルマテリナ科テルマテリナ属の一種（*Telmatherina bonti*）を意味する（SD）のは， テルマテリナは小魚で科も異なるが体形の類似によるのであろう。Betsimisaraka 方言では ***zumpul** 系にボラの原意を残す一方， ***bunti** にはカマスベラを意味するような変化が起った。ボラとカマスベラは，科はもとより体形は全体として異なるものの， 体長は数十センチ， 頭の形はたがいに似て沿岸の浅海に棲む。Betsimisaraka 方言形は前鼻音化した接頭辞 a- を含む顕在形である。なお，51）***zumpul** を参照。

15）***buzu[r]**（PNN）キス科（Sillaginidae）の種類＞ bojor（Javanese）（SD）キス属ホシギス（*Sillago maculata*）: (am-)botso（Saka）（BB）/(am-)botsy（Saka）（Ki）: (am-)botso(-ka)（Vezo）（BB）/(am-)botso(-ke)（Vezo）（Ki）モトギス（*S. sihama*）。

Javanese の bojor は Malay では besot という。マダガスカル形は前鼻音化を伴った接頭辞 a- の顕在形である。Sakalava 方言の語中の -ts- は例外的であるが，*qizaw「緑色」＞ (ma-)itso「緑色」の変化に類する。Vezo 方言の語末の -ke は他の方言の -ka に対応し開音節化の接尾辞である。ただし，-ka の起源は不明である。なお，07）***besut** を参照。

16）***buwan**（PNN）コイ科コイ亜科シクロケイリクシス属（*Cyclocheilichthys* spp.）＞ buan（東ボルネオ）（SD）シクロケイリクシス属の一種（*C. apogon*）‘beardless barb’: voana (Betsim)（Ki）イソギンポ科ヤエヤマギンポ属の一種（*Salarias monochrus/ S. striatomaculatus*）。

淡水魚から海水魚に変化した例。シクロケイリクシス属とヤエヤマギンポ属は体長が十数センチになるもののヤエヤマギンポ属には鱗がなく，体形もかなり異なる。ヤエヤマギンポ属は沿岸域に生息するが食用とされず，意味変化の理由は明らかでない。なお，buan-buan（Tagalog）（HU）イセゴイ（*Megalops cyprinoids*）は bulan-bulan（Malay）（M）イセゴイと対応するが，「月」を意味する PMP *bulan（D）＞ buan（Tagalog）: bulan（Malay）の重複形で，本項目とは関係がない。

17）***ce(N)Du**（PNN）ダツ科（Belonidae）の種類＞ cendro（西ジャワ）テンジクダツ（*Tylosurus acus melanotus*）: tenro（Bugis: Makasar, 南セレベス）（SD）/tenroq（Makasar）（C）テンジクダツ：tsero(-driva)（Saka）（BB）ダツ科テンジクダツ・オキザヨリ（*T. acus melanotus/T. crocodilus crocodilus*）。

マダガスカル形の後部要素 -driva は riva「リーフの外の深海で小高くなった暗礁」と関係があろう（飯田 2008）。光に突進するダツは危険な魚として知られている。Sakalava では tsera(-dava) もテンジクダツ・オキザヨリを意味するが（BB），tsera- の末尾母音が不規則的である。後部要素 -lava/-dava は「長い」の意味である。末尾母音の同じ例外形が，tsera(-pohe)（Vezo）（BB）: (an-)tsera(ka)(-vonina)（Saka）（BB）ホシサヨリ（*Hemiramphus far*）・マルサヨリ（*Hyporhamphus dussumieri*）にも認められる。後部要素の -pohe は fohy「短い」（飯田：私信），-vonina は vony「黄色」の意味。

18）***ci(ŋ)kaw**/***ti(ŋ)kaw**（by-form）（PNN）ヒメジ科ウミヒゴイ属（*Parupeneus* spp.）＞ ciko-ciko（Makasar：Bugis, 南セレベス）（SD, C）ウミヒゴイ属の一種（*P. luteus*）: tiko（Muna; Buton, 南セレベス）（SD）オジサン（*P. trifasciatus*）: tiko-tiko（Muna, 南セレベス）（SD）ミナミヒメジ（*Upeneus vittatus*）: tsiko/tsioka（Betsim）（Ki）ボラ科アゴノストムス属の一種（*Agonostomus telfairii*）。

（B1980）の祖語形*tiqaw‘goatfish spp.’は（Z）によって*Ciqaw（PAN）‘goatfish’と修正された。これは ti-ao（Visayan：Marinao：Samal：Taosug）（HU）ヒメジ科（Mullidae）のフィリピン形，Chamorro の (l)eau（KIF：Kami, Ikehara and Francisco 1968）ミナミヒメジ，台湾諸語形などから再構成されたものであるが，インドネシア形，マダガスカル形の説明ができないから PAN といえるか疑問である。

19）***cu(ŋ)ki**/***zu(ŋ)ki**（by-form）（PNN）シマイサキ科コトヒキ属（*Terapon* spp.）＞ congki（Makasar, 南セレベス）（SD）ラグシア属（*Lagusia micracantha*/*T. micracanthus*）: drihy（Saka）（BB）コトヒキ（*T. jarbua*）: jihy（Vezo）（Ki, I）/ jihe（Vezo）（S）コトヒキ。

コトヒキは浮き袋から音を発することで知られる。Sakalava 方言の語頭子音は不規則的，またマダガスカル形の第一音節母音 -i- は逆行同化による。なお，Betsimisaraka 方言では擬声語に由来するシノニム形を継承する。22）***gu(ŋ)guŋ** を参照。

20）***dupu[q]**（PNN）ツバメコノシロ科ツバメコノシロ属（*Polynemus* spp.）＞ deppoh/duppoh（Bajau, 小スンダ）（V）ツバメコノシロ属の一種（*P. tetradactylus*）: dofo(-ke)（Vezo）（BB）ツバメコノシロ属（*P.* spp.）。

Vezo 方言形は a- に前鼻音化を伴う ***an-dupu** に由来する潜在形，また語末の -ke は他の方言の -ka と対応し開音節化の接尾辞である。ただし，この -ka の起源は不明である。なお，22）***gu(ŋ)guŋ**, 23）*katambak を参照。

21）***gaguk**（PNN）ハマギギ科（Ariidae）の種類＞ gagok（Malay, 北ボルネオ）（IC）ハマギギ属（*Arius* spp.）: gaguk（南スマトラ）（SD）オオサカハマギギ（*A. goniaspis*/*A. thalassinus*）: gago（東ボルネオ）（SD）ハマギギ（*A. maculatus*）: gagok（Bidayuh, サラワク）（N）‘k.o.fish’: gogo（Saka）（BB）マダガスカルハマギギ（*A. madagascariensis*/*A. polystaphylodon*）。

この魚名は擬声語の可能性がある。ナマズ目のドラス科，ギギ科，ハマギギ科は胸鰭の棘と肩帯の骨をこすり，音を出すことで知られる。このうち，ハマギギ科は海産種である。マダガスカル形は子音の変化が不規則的であるが，*gagak（D）「鳥の鳴き声」＞ gaga（MLG）ムナジロガラス（*Corvus albus*）に類する変化で擬声語に例外的に現れる（D）。ただし，第一音節母音は逆行同化による。なお，Betsimsaraka 方言ではハマギギ属の種類を vaona/vahona という。06）***bawuŋ** を参照。

22）***gu(ŋ)guŋ** シマイサキ科コトヒキ属（*Therapon* spp.）＞ gogu（Muna, 南セレベス）（SD）ヒメコトヒキ（*T. theraps*）: gunggong（Tagalog）（HU）: gunggong（Visayan）（Sch）シマイサキ科（Theraponidae）の種類：gogo(-ka)（Betsim）（Ki）ヒメコトヒキ。

コトヒキは浮き袋から音を発することで知られる。この魚名は擬声語の可能性がある。マダガスカル形は子音の変化が不規則的であるが，擬声語に例外的に現れる（D）。なお，語末の -ka は起源が不明である。19）***cu(ŋ)ki** を参照。

23）*katambak（B1980）‘fish sp.’／フエフキダイ科（Lethrinidae）の種類＞ tambak（Malay）（M）マナガツオ科シズ属の一種（*Stromateus niger*）/tambak（Sco）アジ科クロアジモドキ属クロアジモドキ（*Parastromateus niger*）: tambak（西ジャワ）（SD）フエダイ科フエダイ亜科フエダイ属の一種（*Lutjanus vaigiensis*）・ヘロストマ科ヘロストマ属キッシンググラミー（*Helostoma temmincki*）: ketamba（南セレベス・東ボルネオ）（SD）フエフキ属（*Lethrinus* spp）: katambaq（Makasar, 南セレベス）（C）フエフキ属 ： kutāmbaq（Bajau, 小スンダ）（V）フエフキ属の一種（*L. rostratus*）: kutamba?（Bajo, マルク）（S）フエフキ属：katambak（Visayan）（HU）フエフキ属の一種（*L.* sp.）: **tabáke**（Vezo）（Ko）ブダイ科アオブダイ亜科アオブダイ属の一種（*Scarus* sp.）/tabàke（Vezo）（I）ブダイ属：**tabaka**（Saka）（BB）ベラ科モチノウオ亜科モチノウオ属メガネモチノウオ（*Cheilinus undulatus*）。

24）***kerut/*gerut**（by-form）（PNN）イサキ科ミゾイサキ属（*Pomadasys* spp.）＞ gerut-gerut（Malay）（Sco）ホシミゾイサキ（*P. hasta*）: kerot-kerot（西ジャワ）（SD）ミゾイサキ属の一種（*P. furcatus*）: garut（西ボルネオ）（SD）ホシミゾイサキ：korriu（Palauan）（HR）イサキ科コショウダイ属の一種（*Plectorhinchus gaternius*）: heroto（Saka）（P）コショウダイ属の一種（*P. griseus*＝*Diagramma griseus*）。

Sakalava 方言の hereto の語末母音 -o は，順行同化による開音節化現象のため。

25）***ki(n)taŋ** クロホシマンジュウダイ科クロホシマンジュウダイ属（*Scatophagus* spp.）＞ ketang（Malay）（M, Sco）: ketang-ketang（西ジャワ）（SD）: kitam（西ボルネオ）（SD）: kitang-kitang（アンボン）（SD）クロホシマンジュウダイ（*S. argus*）: kitang（Tagalog）（HU）クロホシマンジュウダイ : hita（Tano : Vezo）（Ki）: hintra（Saka : MLG）（Ki）: hintana（Betsim）（Ki）: hintana（Betsim）（Ki）クロホシマンジュウダイ属の一種スキャッティ（*S. tetracanthus*）。

（BB）は Sakalava 方言，Vezo 方言の hinta をアイゴ属としているが，誤りと思われる（S）。ただし，クロホシマンジュウダイ科とともにアイゴ科はニザダイ亜目（Acanthuroidei）に分類される。沿岸低地方言では hintana-filaovanda「斑点のある魚菜」（CR : Collart et Rabelahatra 1977）がスキャッティを指す。Sakalava, Vezo 両方言のアイゴ属は05）***barunaŋ** を参照。なお，（B1980）の *kiteŋ ‘marine fish sp. with venomous dorsal spines’ はアイゴ属と思われ，kitung（Visayan）ゴマアイゴ（*Siganus guttatus*）（Sch）: hiting（Chamorro）（KIF）ブチアイゴ（*S. punctatus*）などがこの変化に含まれるが，本項目とは別の言葉か，再構成法に問題がある。また Ngaju-Dayak の kiting（Ha）は「魚の背鰭」を意味し特化が起っている。クロホシマンジュウダイもアイゴも各鰭の棘に毒があるなど共通点はあるが，Blust の *kiteŋ からはマダガスカル方言形の説明ができない。

26）***kuwaŋ**（PNN）ハゼ科ハゼ亜科ウロハゼ属（*Glossogobius* spp.）＞ kuang（中部スマトラ）（SD）ウロハゼ属の一種（*G. giuris*）: kuaŋa（Saka）（TF）魚の一種 ‘non identifié’/koana（Saka）（BB）イトヨリダイ科イトヨリダイ属の一種（*Nemipterus bleekeri*）。

Sakalava 方言形は接頭辞 a- に前鼻音化を伴う ***aŋ-kuwaŋ** に由来する潜在形。

27）***lamas** サバ科（Scombridae）の種類＞ (k)lemes（Madura）（SD）サバ属の一種（*Lactarius lactarius* = *Scomber lactarius*）: lama（Buton: Muna, 南セレベス）（SD）ブダイ科ミゾレブダイ属ミゾレブダイ（*Leptoscarus vaigiensis*）: (ra)ramas（Wahai, セラム）（SD）サバ属の一種 : lamas（Tagalog）（HU）クロサギ科クロサギ属の一種（*Gerres* sp.）: lamatra（Betsim : Vezo）（BB）イソマグロ属イソマグロ（*Gymnosarda unicolor*）・カツオ属カツオ（*Katsuwonus pelamis*）・グルクマ属グルクマ（*Rastrelliger kanagurta*）: lamatra（Betsim）（BB）サワラ属ヨコシマサワラ（*Scomberomorus commerson*）: lamátsa（Vezo）（Ko）サワラ属の一種（*S. leopardus*）。

Vezo 方言ではイソマグロを lamatra bory「短い」，ヨコシマサワラを lamatra ngeza「大きい」のように lamatra に形容詞を付け区別する（S）。Flacourt（1658）が lamatre と記し，タラ‘morüe’と訳すのは誤解である。マダガスカル形で語末子音 *-s が -tra/-tsa に変化するのは例外的であるが，*rasDas(D)「避けた」＞ raratra「分ける」のような類例がある。なお，43）***tepu** を参照。

28）***lapu**（PNN）フカカサゴ科ミノカサゴ亜科ミノカサゴ属（*Pterois* spp.）＞ lapo/lappo（Makasar, 南セレベス）（SD, C）ミノカサゴ属の一種（*P. russelli*）: láfu（Vezo）（Ko）ハナミノカサゴ（*P. volitans*）: lafa（Saka）（P, S）ミノカサゴ属（*P.* spp.）。

Sakalava 方言の語末母音 -a は不規則的である。また ***lapu** が lafa-lovo（Saka）（BB）ゴンズイ科ゴンズイ（*Plotosus lineatus*）の lafa- にも含まれる可能性がある。-lovo は 30）***lu(m)buh** とは関係なかろう。両者とも鰭棘に強い毒があり，釣り人に恐れられる。

29）***luly**（PNN）ハダカイワシ科ハダカイワシの一種（*Harpodon* sp.）＞ luli（Malay: 西ジャワ）（Sco, SD）ハダカイワシ科ハダカイワシ（*H. nehereus*）（Scopelidae＝Myctophidae）: lily（Saka : Vezo）（BB, S）ヒイラギ科セイタカヒイラギ（*Leiognathus equulus*）。

マダガスカルの lily は逆行同化による形である。

30）***lu(m)buh**　ハタ科（Serranidae）の種類＞ lumu（Bajau, 小スンダ）（V）マハタ属の一種（*Epinephelus boenack*）: lubo（Tagalog）（HU）（正確には lubo?）ハタ科 : lúvu（Vezo）（Ko）マハタ属の一種（*E.* sp.）/lovo（Vezo）（S, I）マハタ属（*E.* spp.）: (a-)lovo（Betsim : Saka）（Ki, BB）マハタ属。

ハタ科には *kurapu（D）「魚名ないし水棲動物」/*kurapu（B1984–1985）‘perch, sea（？）’（*sic*）が再構成され，kerapu（西ジャワ）（SD）: kulapo（Tagalog）などへと変化するが，*kurapu はオセアニアにまで分布する（Barnett 1978）。*kurapu に由来する Tagalog の kulapo は特定化されたサラサハタ（*Cromileptes altiveles*）(*sic*) を指す（Avery 1950）。また Tagalog でハタ科は lapo-lapo/lapu-lapu/lapu-lapo というのが一般的である（HU）。一方，Tagalog の kerapo はヒトミハタ（*E. tauvina*）（HU）を指し，この語形は語中子音 -r- から Malay の借用語であることが分かる。祖語形としては，その分布から ***lu(m)buh** が *kurapu より古形とみられるが，オセアニアを含む広い地域で *kurapu 系に置き換わったと考えられる。なお，Vezo 方言の luvu/uluvu（*sic*）

‘k.o.fish’をバントゥ祖語形 *-dûb‘fish’の借用語とみる Adelaar（2006）説が誤りであることは，本項目によって明らかである。

31）***luŋuran**（PNN）アジ科（Carangidae）の種類＞ longoran（Makasar, 南セレベス）（SD, C）マブタシマアジ属エビヒラアジ（*Caranx kalla*＝*Atule djedaba*）: lungra（サパルア）（SD）カタクチイワシ科エツ亜科オオイワシ（*Thryssa baelama*）: laŋúra（Vezo）（Ko）アジ亜科（Caranginae）の種類 /lañora（Vezo）（I）ヨロイアジ属の一種（*Carangoides* sp.）/lanora（Vezo）（S）ヨロイアジ属 : lanora（Tano）（BB）ギンガメアジ属ロウニンアジ・ギンガメアジ（*Caranx ignobilis/C. elacate*）: lanorana（Saka）（Ki）ギンガメアジ属の一種（*C. hippos*）。

マダガスカル諸方言で語頭母音が -o- でなく -a- になるのは語末の -a による不連続的な逆行同化によるものであろう。マダガスカル祖語の段階で起っている。なお，44）***tiRay** を参照。

32）***makaluw**（PNN）コイ科バルブス亜科レプトバルブス属（*Leptobarbus* spp.）＞ makalou（Orang Sungei, 北ボルネオ）（IC）レプトバルブス属 : mahalo(-ky)（Saka）（BB）タカサゴ科タカサゴ属ハナタカサゴ（*Caesio lunaris*）。

淡水魚から海水魚に変化した例。Sakalava 方言の語末 -ky の起源は不明である。なお 10）***bunduŋ**, 54）***piyam** を参照。

33）***maluŋ**（PNN）ウナギ目（Anguilliformes）の種類＞ malong（Malay）（M, Sco）ハモ科ハモ属（*Muraenesox* spp.）・ウツボ科（Muraenidae）: malong（南ボルネオ）（SD）ハモ（*M. cinereus*）: malang（Iban）（R）‘unidentified seafish often caught in estuaries’: malang（中部スマトラ）（SD）ハモ属の一種（*M. talabon*）: (a-)malona（MLG）（Ki）ウナギ属（*Anguilla* spp.）ウナギ科 : (a-)malo（Bara）（E）ウナギ属 : (a-)malona（Betsim）（BB）アンギラビコロール（*A. bicolor bicolor*）・オオウナギ（*A. marmonata*）: (a-)maluŋu（Saka）（TF）ウナギ : (a-)màlo/(a-)màloña（Tana）ウナギ 。

祖語形ではウナギ目を意味した言葉がマダガスカルではウナギの呼称に変化し，ウツボとは語源不明の lamera/lamerana（Saka）（BB）によって区別した。ウナギには amalo- を複合語の前部要素とする10以上の区別が行われている（Ki）。

34）*paraŋ（D）「鉈」/（PNN）オキイワシ科（Chirocentridae）＞ parang-parang（M, Sco）オキイワシ（*Chirocentrus dorab*）: parang-parang（西ジャワ・Hitu, アンボン・Haria, サパルア）（SD）オキイワシ：parang（東ボルネオ）（SD）コイ科ハエジャコ亜科マクロキリクシスマクロキルス（*Macrochirichthys macrochirus*）: parang（Iban）（R）ノコギリエイ科プリスティス属（*Pristis* spp.）: parang-parang（Hitu, アンボン）（SD）タチウオ科タチウオ属の一種（*Trichiurus haumela*）: parang-parang（Tagalog）（HU）オキイワシ：(am-)porama（Vezo）（S）フエダイ科フエダイ亜科ヨスジフエダイ（*Lutjanus kasmira*）: (am-)parana（Saka）（BB）ニセクロホシフエダイ（*L. fulviflammus*）。

（D）は Tagalog の palang「鉈」： Malay の parang「鉈」および Ngaju-Dayak の parang「ノコギリエイの鋸」（*sic*）によって本項目を再構成する。魚名ではなく「鉈」が原意であったことは，Malay, Tagalog において重複形で現れることから分かる。重複には類似を表す機能がある。ただし， Tagalog の parang-parang は語中の -r- によって Malay からの借用語であり，Malay の対応語とみた崎山（1980）を訂正する。東ボルネオのコイ科は淡水魚である。目レベルで魚種の違いが大きいが，オキイワシ，マクロキリクシスは背鰭が著しく後ろにあり鉈のような体形で体長は１メートルに達すること，オキイワシ，タチウオは非常に鋭い歯をもつこと，またいずれも食用魚である。ノコギリエイも淡水域に生息し，大きな皮歯をもつほか，食用や薬用に捕獲される。ただし，マダガスカルのフエダイへの変化の契機は明らかでない。Vezo 方言は不規則的な変化を含む。Sakalava 方言には amparana に対し fiam-bato「石魚」，fia-masiaka「どう猛な魚」という別名もある（BB）。

35）***pilak**（PNN）アカメ科アカメ属ミナミアカメ（バラマンディ）（*Lates calcalifer*）＞ pelak（Javanese）（SD）バラマンディ：(am-)pela-fela（Betsim）（Ki）ヒメツバメウオ科ヒメツバメウオ属の一種（*Monodactylus falciformis*）。

ミナミアカメは浅海から汽水域，淡水域に生息する大型魚，ヒメツバメウオも浅海から淡水域にかけ生息する中型魚，体高が高く，強く側扁することが共通点として指摘できる。なお，ヒメツバメウオを Sakalava 方言では **daŋira**,Vezo 方言では tala-tala という。40）***talaŋ**, 41）*taŋiRi , 53）***kucu**, 55）*tamban を参照。

36）***piŋan**（PNN）コイ科（Cyprinidae）の種類＞ pingan（西ボルネオ）（SD）コイ科コイ亜科シンニクシス属の一種（*Thynnichthys thynnoides*）: (am-)piny（Saka）（BB）: (am-)piny（Betsim）（Ki）ギンイワシ属（*Dussumiera* spp.）・ウルメイワシ

属（*Etrumeus* spp.）・マイワシ属（*Harengula* spp.）・ニシン科ニシンダマシ亜科ヒルサ属ケリーニシンダマシ（*Hilsa kelee*）: (am-)pina（MLG）（BB）ケリーニシンダマシ。

いずれも体長約20センチ以上，丸い腹面，腹鰭，尾鰭など，コイ科とウルメイワシ科は全体が良く似ている。淡水魚から海水魚へと変化した例である。

37）*qalu（B1980; 1984–1985）‘barracuda’/***qalu**（Z：PMP）カマス科ダルマカマス‘*Sphyraena obtusata*’＞ alu-alu (Malay) (M, Sco): alu-alu (西ジャワ: Javanese)（SD）カマス属（*S.* spp.): **alo-alo**（Vezo）（BB）カマス属。

（Z）は祖語形に特化した意味を与えているが適当ではない。マダガスカルでカマス属への呼び名には変異が多いが（P, Ki, BB），オーストロネシア諸語との関係が明らかなのはこの語のみである。*qalu はメラネシアにまで広がる（Barnett 1978）。なお，Mahafaly 方言の alo-alo「墓標」あるいは Merina 方言の alo-alo「堀」とは語源的に関係がなく，後者は PMP *aluR（D）「溝」にさかのぼるが，前者は不明。

38）***saŋan**（PNN）コイ科バルブス亜科プンティウス属の一種（*Puntius bulu*）＞ sangan（東ボルネオ): sangang（南ボルネオ）（SD): (an-)tsanga / (an-)tsangy（Saka）（Ki）タイ科ヘダイ亜科ヘダイ属（*Rhabdosargus* spp.）。

Sakalava 方言への変化は接頭辞 a- に前鼻音化を伴った ***an-saŋan** に由来し，また語中の *-ŋ- は [-ŋ-/-ŋg-] に変化する。04）***baŋlus** を参照。淡水魚から海水魚に変化した例。ただし，sangan が南ボルネオおよび中部スマトラにおいて海水魚のニシン科ニシンダマシ亜科ヒルサ属の一種（*Clupea toil*＝*Hilsa toli*）も指す（SD）。

39）***suga** イットウダイ科（Holocentridae）＞ sogo（Javanese）（SD）イットウダイ亜目アカマツカサ亜科アカマツカサ属ウロコマツカサ（*Myripristis melanostictus*）: sogo（Bajo : Buton : Muna, 南セレベス）（SD）イットウダイ亜科イットウダイ属クラカケエビス（*Holocentrum caudimaculatum*＝*Sargocentron caudimaculatum*）: suga（Tagalog）（HU）テンジクダイ科（Apogonidae）の種類 : suga-suga（Visayan）（HU）イットウダイ科 : suga（Bikol : Marinao : Samal : Taosug）（HU）イットウダイ亜科ノボリエビス属の一種（*Holocentrus* sp.): sohi-sohy（Saka）（BB）イサキ科ミゾイサキ亜科ホシミゾイサキ（*Pomadasys hasta*）。

インドネシア諸形の語末の -o は順行同化によるもの。イットウダイ，テンジクダイ，ホシミゾイサキは目レベルで分類が異なるが，浅い岩礁に棲み眼が大きく，体長も数十センチ，水産上の有用性は低いなどの共通点をもつ。

40）***talaŋ**　アジ科イケカツオ属イケカツオ（*Scomberoides lysan*＝*Chorinemus sanctipetri*）＞ talang（Malay）（M, Sco）: talang-talang（Makasar）（C）: talang-talang（Tagalog : Bikol）（HU）イケカツオ : talan-tala（Vezo）（Ki, I）アジ科コバンアジ属の一種（*Trachinotus* sp.）: tala-tala（Betsim）（BB）サバ科オオクチイケカツオ（*S. commersonnianus*）・ミナミイケカツオ（*S. tol*）: tala-tano（MLG）（P）イケカツオ : tala-tala（Vezo）（BB）ヒメツバメウオ科ヒメツバメウオ属ヒメツバメウオ（*Monodactylus argenteus*）。

Vezo 方言でヨコシマサワラをいう tala-feta（BB）の前部要素 tala- は ***talaŋ** に由来する可能性がある。その場合，-feta は「泥」の意味。またマダガスカルのイケカツオの一般的呼称 tala-tano にも tala- が含まれるが -tano の意味は不明。なお，41）*taŋiRi を参照。

41）*taŋiRi（D）「魚名」/*taŋiRi ‘Spanish mackerel’（B1984–1985）（Z: PMP）/*taŋgiRi（B1989）‘Spanish mackerel’ / サバ科サワラ属（*Scomberomorus* spp.）＞ tenggiri（Malay : Iban）（Sco, R）ヨコシマサワラ : tengiri（西ジャワ）（SD）ヨコシマサワラ : tengiri（Bajau, 小スンダ）（V）カツオ（*Katsuwonus pelamis*）・ヨコシマサワラ（*S. commerson*）: tangginggiʔ/tangigiʔ/tanigiʔ（Tagalog）（HU）ヨコシマサワラ : dangiry（Vezo）（I）ヒメツバメウオ科ヒメツバメウオ属ヒメツバメウオ（*Monodactylus argenteus*）: **dangira**（Saka）（Ki, BB）ヒメツバメウオ。

Vezo 方言のヒメツバメウオ **dangiry**（I）は Sakalava 方言の影響による語であろう。ただし，（Poirot　n.d.）でも Vezo 方言の **dangiry**（＝bemaso「大目」）は **tala-tala** とともにヒメツバメウオ属の一種（*M. falciformis*/*M. argenteus*）とする。なお，40）***talaŋ** を参照。

42）***tapa[q]**（PNN）ナマズ科（Siluridae）の種類＞ tapah/tapa（Malay）（M）ナマズ科オムポック属オムポックパブダ（*Callichrous pabda*＝*Ompok pabda*）・tapah/tapoh（Malay : Orang Sungei, 北ボルネオ）（IC）ナマズ科ワラゴ属ワラゴマクラートゥス（*Wallago maculatus*）: tapah（南ボルネオ）（SD）ワラゴ属ワラゴレーリー（*W. leerii*）: tapah（Bidayuh, サラワク）（N）ワラゴ属ワラゴミオストマ（*W. miostma*）:

tapah（Iban）（R）ワラゴ属の一種（*W.* sp.）: (an-)tafa（Betsim）（BB）ボラ科メナダ属（*Liza* spp.）/(an-)tafa(-na)（Betsim）（Ki）ボラ属の一種（*Mugil œur*）: (an-)tafa（MLG）（Bu）ボラ（*M. cephalus cephalus*）。

淡水魚から海水魚（ボラは淡水域に遡上する）に変化した例となる。

43）***tepu**（PNN）ダツ科クセネトドン属ニードルガー（*Xene(n)todon canciloides*）＞ tepu（西ボルネオ）（Haria, サパルア）（SD）ニードルガー : tefo（Saka）（BB）サバ科サワラ亜科カンダイサワラ（*Scomberomorus plurilineatus*）。

44）***tiRay/*tilay**（by-form）カタクチイワシ科（Engraulidae）の種類＞ teri（Malaly）（M, Sco）カタクチイワシ科インドアイノコイワシ属（*Stolephorus* spp.）: teri（Javanese）（SD）インドアイノコイワシ属 : tigi（Visayan）（HU）カタクチイワシの一種（*Scutengraulis* sp.）/tigi（Visayan）（Sch）カタクチイワシ科エツ亜科オオイワシ（*Thrissina baelama*＝*Thryssa baelama*）・ソトイワシ科ソトイワシ（*Albula vulpes*）: telai（Palauan）（HR）インドアイノコイワシ属の一種（*S. heterolobus*）: tsaidy（Vezo）（BB）ヒイラギ科シマヒイラギ属セイタカヒイラギ・ヒイラギ科ウケグチヒイラギ属の一種（*Leiognathus equulus/L. insidiator*＝*Sector insidiator*）。

マダガスカルでは tsaily という形も方言形として期待されるが（valiha/vadiha「竹筒琴」, kily/kidy「小さい」などのような類例がある）確認できない。また *-i- が -ai- と二重母音化する理由は不明である。

45）***tuguk**（1）（PNN）ボウズガレイ科（Psettodidae）の種類 ＞ togok（Malay）（Sco）ボウズガレイ（*Psettodes erumei*）: toho（Vezo）（I）コチ科（Platycephalidae）: toho（Vezo）（S）コチ属コチ（*Platycephalus indicus*）: toho（Betsim）（BB）コチ属（*P.* spp.）。

ボウズガレイ（カレイ目の起源といわれ，眼の左右が一定しないなど原始的な特徴を留める）とコチはいずれも砂泥底に棲息，擬態し，背鰭に鋭い棘があること，また食用になる点で共通性がある。いずれも体形が縦扁しているため，英語ではカレイが‘flatfish,’コチが‘flathead’と呼ばれる。Malay でボウズガレイ科をカレイ目の ikan sebelah または sebelah「片身の魚」のなかで区別しない記述もあるが（M），新しい変化であろう。マダガスカルでコチ属は岩底，泥底に棲むものを，それぞれ tohom-vato（*sic*），tohom-pasy/tohom-pase（Saka : Vezo）のように「石」,「砂」を後置し区別する（P,

BB）。また toho の複合語として toho-lava はキス科キス属モトギス（*Sillago sihama*）を指し（Betsim）（BB），-lava は「長い」の意味である。その他，toho を複合語とする魚名は十数例報告されている（Ki）。

46）***tuguk**（2）（PNN）ナマズ目ギギ科レイオカシス属（*Leiocassis* spp.）＞ tugok（Malay, 西ボルネオ）（SD, Bu）レイオカシス属の一種（*L. micropogon*）: toho（Saka）（Ki）カワアナゴ科カワアナゴ亜科カワアナゴ属テンジクカワアナゴ（*Eleotris fusca*）: toho(-vondrona)（Betsim 北部）（Ki）カワアナアゴ属の一種（*E. vittata*）: toho（Betsil）（Ki）ハゼ科ハゼ亜科ウロハゼ属の一種（*Gobius* sp.）: toho(-be)（Betsim）（Ki）ウロハゼ属の一種（*G. giuris* = *Glossogobius giuris*）toho(-lopatra)（Betsim）（Ki）ウロハゼ属の一種（*Periophtalmus koelreuteri* = *G. koelreuteri*）: toho(-fotsy)（MLG）（Ki）ウロハゼ属の一種：toho(-bakera)（Taim）（Ki）ウロハゼ属の一種

toho はコチ属のほか，マダガスカルの広域で淡水魚のウロハゼ属，カワアナゴ属を指すが，シノニムである場合が多い。祖語 ***tuguk** の段階で Malay の地域的方言かあるいは別の言語にホモニム（１），（２）が存在したと考えられる。Sakalava 方言では toho が他の方言の toho mainty「黒い toho」テンジクカワアナゴを意味する（Ki）。ただし，南西部の Sakalava 方言域に位置する Ihotry 湖で多く捕獲される魚種はプティコクロミス属（*Ptychochromis*），パラティラピア属（*Paratilapia*）のほか，toho と呼ばれるウロハゼ属の一種（*G. giuris*）である（P）。マダガスカル諸方言の語末の -vondrona, -be, -lopatra, -fotsy, はそれぞれ「ガマ科植物の一種」「大きい」「大砲」「白い」の意味である。マダガスカル全体でみると，カワアナゴ属を指すのは Sakalava 方言から南部の Antandroy, Antanosy 方言，そして Bestimisaraka 北部方言にかけての沿岸地域，ウロハゼ属は高地の Malagasy から南の Betsileo, Antaimoro 方言，東の Betsimisaraka 方言にかけての内陸部に分布する。ただし，Tanala 方言の toho「魚の一種」（Be）という情報だけからは分布が分からない。また，FAO のデータ（CR）では tohobe（*Gobius*）を沿岸低地，tohofotsy（*Eleotris*）を高地としているが，若干ずれがある。

西ボルネオのレイオカシス属は淡水魚であるが，ウロハゼ属，カワアナゴ属はいずれもスズキ目ハゼ亜目（Gobioidei）に含まれ河口から淡水域の砂底，砂泥底に生息する。レイオカシス属は短い口ひげをもつという特徴はあるものの，体長，体形，生息域の似寄りによりウロハゼ属，カワアナゴ属に変化したと推定される。なお，06）**bawuŋ** を参照。

マダガスカルで toho は人びとに親しい魚とみえ，諺に多く登場する。その一つにいわく，

Mandidy sofin-*toho*, mizara sofin’ amalona, ka sady kely no an-kanifisana.

（Houlder 1960）「ハゼやウナギの鰓を切り分け小さく細かくすること＝重箱の隅を楊枝でせせる」

47）***tula**（PNN）アジ亜科（Caranginae）の種類＞ tola（Wahai, セラム）（SD）ギンガメアジ属の一種（*Caranx leptolepis*）: (ba-)tola（Betsim）（BB）ギンガメアジ属（*C.* spp.）・ヨロイアジ属ホシカイワリ（*Carangoides fulvoguttatus*）・マテアジ属マテアジ（*Atule mate*）・マブタシマアジ属エビヒラアジ（*Alepes djedaba*）。

(ba-)tola の ba- は，オーストロネシア語族系の接頭辞の痕跡であろう。なお，11）***buŋka** も参照。（B1984–1985）および（Z）が *qatulay（PMP）‘scad, big-eyed’ メアジ属メアジ（*Trachurops crumenophthalmus*）を再構成するのは，atulai（Chamorro）: chedui[ʔedui]（Palauan）: atule（Samoan）: akule（Hawaiian）などの比較に基づく。この語の分布の特徴は，ミクロネシア（西部マライ・ポリネシア語派）からオセアニアにかけてである。***tula** と語形は似るが，地域的（方言的）なものか二次的（後発的）なものか明らかでない。

48）***tuluy** ニシン科（Clupeidae）の種類＞ teli（Hitu, アンボン）（SD）ニシン亜科ニシン属の一種（*Clupea longiceps/C. fimbriata*）: tuloy（Visayan）（HU）ニシン亜科サッパ属マラバールイワシ（*Sardinella longiceps*）: telo（Betsim）（BB）アジ科コバンアジ属コバンアジ（*Trachinotus baillonii*）・コバンアジ属マトコバンアジ（*T. russelli*＝*T. botla*）。

49）***tumbu**（PNN）タイワンドジョウ科（Ophiocephalidae＝Channidae）＞ tumbu（西スマトラ）（SD）タイワンドジョウ属 ‘snakehead’ の一種（*Ophiocephalus striatus*＝*Channa maculata*）: (an-)tombo(-ho)（Saka）（BB）/tombo(-hy)（Saka）（S）メナダ属（*Liza* spp.）・ボラ科タイワンメナダ属（*Valamugil* spp.）。

タイワンドジョウは湿地帯の淡水魚で空気呼吸をすることで知られ，メナダより大きくなり，背鰭の形などもメナダと大きく異なる。しかし，頭が小さく平たい（英名はこの特徴に基づく），またメナダもボラ科のなかでは頭が小さく汽水域にかけて生息するため，このような意味変化が起ったと考えられる。Sakalava 方言語末の -ho/-hy は起源が不明である。

50）***zuku**（PNN）イトヨリダイ科（Nemipteridae）の種類＞ juku（Bugis: Makasar, 南セレベス）（SD）/jukuq（Makasar）（C）イトヨリダイ属の一種（*Nemipterus hexodon*

/*N. gracilis*): zoho（Saka ： Vezo）(BB）フエダイ科フエダイ亜科ゴマフエダイ（*Lutjanus argentimaculatus*）。

51）***zumpul**（PNN）ボラ科（Mugilidae）の種類＞ jempul（Malay）(M, Sco）メナダ属テードグレイミュレット（*Mugil planiceps*＝*Liza tade*): jumpul（西ジャワ）（SD）ボラ属（*M.* spp.): jumpul（Ngaju-Dayak）(Ha）「海水魚の一種」: jompo/ompo（Saka ： Tano）(Ki, BB）メナダ属コボラ・ボラ属ボラ（*M. macrolepis*＝*L. macrolepis*/*M. cephalus cephalus*): zompona/zimpona（Betsim）(Ki, BB）コボラ。

Flacourt（1685）は zonpon‘le mulet’と記し，非常に美味という。hena-lahy「男の食肉」とも呼ばれるのはそのためか。zompona/zimpona の語末の -na は ***buntal** ＞ vontana の類例である。なお，13）***bu(n)tal**, 14）***bunti** を参照。

3　淡水魚――カワスズメ科ほか

海水性，淡水（汽水）性という区別は，ウナギ，テリナゴ，ボラ，コチ，ハマギギなどには厳密には該当しない。ただし，一生のほとんどを淡水域で過ごす魚種としてオーストロネシア祖語形では *bali[d/D]a（D）「魚名」/*belida（崎山1980）ナギナタナマズ科（Notopteridae），*puyu（B1980）‘climbing perch’/ キノボリウオ科キノボリウオ（アナバス）属の一種（*Anabas scandens*），*guramay（崎山 1980）オスフロネムス科オスフロネムス亜科オスフロネムスグラミー（*Osphronemus goramy*）などが再構成されている。ただし，ナギナタナマズ，キノボリウオはマダガスカルに生息しない。マダガスカルの魚種はオーストラリア大陸のそれと酷似し，ナマズ目ハマギギ科（Ariidae）のほかは骨鰾上目（Ostariophysi）をまったく欠いている（ノルマン 1970）といわれる。マダガスカルのカワスズメ科（シクリッド科）（Cichlidae）はかならずしも淡水にだけ棲むのでなく河口にも生息するのは遠い昔にアフリカ大陸からマダガスカルが分離したあと海を渡ってきたからで，マダガスカルのどの淡水魚もそのように結論づけてよいとノルマンはいう。ただし，カワスズメ科の大洋渡海説に対する異論も紹介されている（小山　2009)。マダガスカルの淡水魚の固有種は７科報告されているが，いずれも外来魚の増殖によって絶滅の危機に瀕しているという（Saunders 2007)。現在，マダガスカル固有種のカワスズメ科が，1950年代にアフリカから導入された同じカワスズメ科のティラピア属（*Tilapia* spp.），オレオクロミス属（*Oreochromis* spp.）によって急速に駆逐されつつある（小山　2009)。また，オスフロネムスグラミー（*O. olfax*）がジャワからモーリシャス経由で1875年，マダガスカルに導入され，Toamasina の Ivondro 川

で養殖が始まり（P），lao-bazaha（Betsim）/lo-bazaha「異国のおかず」と呼ばれた。その少しまえ，1860年頃，コイ亜科フナ属ヒブナ（キンギョ）（*Carassius auratus*）が王妃の観賞用に導入され（P），その名称として trondro gasy「祖国の trondro」と呼ばれた。コイ科のコイ（*Cyprinus carpio*）も導入種で高地（MLG）および沿岸西部（Saka?）では借用語の karpa（CR）また be-sisika（Siha）「大鱗」と新たに命名された（Ki）。trondro の語源は明らかでないが，もともとマダガスカルの原生種であるカワスズメ科の幾種類かを指したと推定され，のちに外来種であるコイ科フナ属の総称となり，さらに現在，地域によっては広く魚一般を指すようになったと考えられる。Tanala 方言では tròndro は hèna とシノニムになる（Be）。

淡水魚のうちマライ・ポリネシア祖語形（またはヌサンタラ祖語形）にさかのぼるとみられるのは，カワスズメ科の一種 garaka, kotso/kotro, fiana および damba，メラノタエニア科ベドティア亜科（Bedotiinae）の一種 zono である。

52）***garuk**（PNN）キノボリウオ（アナバス）科キノボリウオ（*Anabas testudineus*）＞ garok/karok（Dusun, 北ボルネオ）（IC）キノボリウオ：garaka（Tank）（Ki）カワスズメ科エトロプルス亜科パレトロプルス属の一種（*Paretroplus polyactis*）。

キノボリウオもパレトロプルスも淡水魚である。ただし，Antankarana 形は接頭辞 a- の前鼻音化を伴う ***aŋ-garuk** に由来する潜在形。ただし，語中の -a- は順行同化によるもの。Adelaar（2006）は，MLG で *g ＞ g となるのは，Malay, Javanese, South Sulawesi の借用語であるとみなす。しかし，Dusun はこのいずれでもない。ad hoc な借用語説では Dusun も新たに追加すべきことになる。

53）***kucu**（PNN）アカメ科ミナミアカメ（*Lates calcarifer*）＞ kucu-kucu（Bugis, 南セレベス）（SD）: kotso（Saka）（Ki, Bu）カワスズメ科エトロプルス亜科パレトロプルス属の一種（*Paretroplus petiti*）: kotro（Mikea）（P）カワスズメ科プティコクロミス亜科プティコクロミス属の一種（*Ptychochromis grandidieri*）。

Sakalava 方言，Mikea 方言は接頭辞 a- に前鼻音化を伴う ***aŋ-kucu** に由来する潜在形。ミナミアカメは沿岸性の肉食魚。なお，35）***pilak**, 55）*tamban を参照。

54）***piyam**（PNN）コイ科バルブス亜科レプトバルブス属の一種（*Leptobarbus melanotaenia*）＞ piam（東ボルネオ・西ボルネオ）（SD）レプトバルブス属の一種：piam-piam（インドネシア，言語名不明）（Bu）レプトバルブス属の一種：piam-piam（Malay）（Academia Sinica 2010）: piam（Iban）（R）‘unidentified large freshwater

fish’: fiana（Betsil）（Ki）プティコクロミス亜科プティコクロモイデス属の一種（*Ptychochromoides betsileanus*）: fiana（Betsim）（Ki）プティコクロミス亜科パラティラピア属の一種（*Paratilapia polleni*）。

魚はマダガスカル南西部を中心として広く fia/fiana と呼ばれるが，この ***piyam** を語源として意味的には祖語形から「分岐」‘divergence’ したことになる。PAN の語末子音はマダガスカルで脱落して fia のように開音節化するか，語末 *-m の場合，-na に規則的に変化する。マダガスカルのカワスズメ科は水産資源として重要であるが（小山 2009），この意味変化はカリマンタン島東部においてレプトバルブス属が現在も年間を通じ多く漁獲されることと歴史的文化的な因果関係がある。また複合語の fian-dahy（MLG）（Bu）はプティコクロモイデス属の一種（*P. vondrozo*）を指す。語末要素の -lahy/-dahy は「男」を意味する。ただし，MLG でプティコクロモイデス属の一種（*P. betsileanus*）は trondo mainty（*sic*）「黒い trondro」という（Bu）。MLG でカワスズメ科パラティラピア属の一種（*P. polleni*）を marakery「小さな斑点のあるもの」というのは（Ki），trondro marakely が縮まった語である。ちなみに，主として淡水魚を捕獲するための茎（うけ）*bubu（D : PMP）はマダガスカルで vovo（MLG）に変化し，いくつかのタイプがある（P）。なお，10）***bunduŋ**, 32）***makaluw** を参照。

55）*tamban（B1980）‘sardine spp.’/ニシン科（Clupeidae）の種類＞ tamban（Malay）（M, Sco）ニシン属（*Clupea* spp.）: tamban（南ボルネオ・西ジャワ）（SD）ニシン属の一種（*C. fimbriata*）: tembang（Makasar, 南セレベス）（SD, C）ニシン属・ギンイワシ属（*C.* spp. /*Dussumieria* spp.）: tambE（Kelantan Malay）（Yamada and Nik Abdul 1999）: tamban/tambang（Tagalog）（HU）ニシン科ニシン亜科サッパ属（*Sardinella* spp.）: damba（MLG : Saka）（Bu, Ki）カワスズメ科エトロプルス亜科パレトロプルス属の一種（*Paretroplus damii*）エトロプルス亜科。

damba は海水魚から淡水魚に変化したことになる。damba の不規則的な *t- ＞ d- への有声化はその条件を明らかにできないが，（2.）*tuna ＞ tona/dona，41）*taŋiRi ＞ daŋiry にも認められる現象である。なお，53）***kucu** を参照。

56）***zaŋo**（PNN）オスフロネムス科（Osphronemidae）の種類＞ jango（Bugis : Makasar, 南セレベス）（SD）オスフロネムス科トガリガシラ亜科トリコガステル属（パールグラミー）（*Trichogaster* spp.）: zono（MLG）（Bu）メラノタエニア科ベドティア亜科ベドティア属（マダガスカルレインボー）（*Bedotia* spp.）: zono（Betsim : Tank）（Ki）カワアナゴ科ノコギリハゼ亜科ティフレオトリス属の一種（マダガスカル洞窟

ハゼ)(*Typhleotris madagascariensis*): zono（地域名・言語名不明)(CR）ベドティア亜科レオクレス属の一種（*Rheocles sikore*）

トリコガステル属はもともと淡水魚である。マダガスカル形の第一音節母音 -o- は逆行同化による。なお，zono は複合語として zono-ala（*Rheocles lateralis*），zono-be（*R. wrightae*）はベドティア亜科レオクレス属の種類を指す（Bu）。語末要素の -ala は「森」，-be は「大きい」の意味である。zono は Betsimisaraka 方言で vily（Betsimisaraka 北部方言では vidy）とシノニムになる（Ki）。なお，08）*bilis を参照。

4 その他の水生動物

なお魚類以外の水生動物として MLG では，*Duyuŋ（D）ジュゴン＞ trozona（Flacourt（1658）は trouze と記す）はマッコウクジラ（*Physeter macrocephalus*），また複合語の trozom-be「大きいクジラ」はナガスクジラ属の一種（*Balaenoptera longimana*)(P）を指す。*peñu（D）ウミガメ＞ fano ウミガメ（リクガメにはいわない）を Flacourt（1658）は fanou と記す。*[h]uRita（D)/*kuRita（B1984–1985）タコ＞ horita（Vezo）マダコ属（I)/horita「タコ」‘pieuvre’（Abinal et Malzac 1888），‘cuttlefish’（*sic*)(Richardson 1885）を Flacourt（1658）は hourite と記し，コウイカ‘seiche’に似た魚（*sic*）という。そのほか，*karaŋ（D）サンゴ＞ harana 珊瑚礁，岩礁，*siput（D）貝＞ sifotra 貝，*kima（D）シャゴガイ科‘Rissenmuschel’/*kima（Z：PMP）‘giant clam’＞ hima（Saka)(TF）シャコガイ科シャコガイ属の一種（*Tridacna elonga*）などがオーストネシア祖語形を継承する。*qu(N)Daŋ（D)/*quDaŋ（B1984–1985）甲殻類 ＞ orana も甲殻類であるが，淡水性のマダガスカルザリガニ（*Astacoides madagascariensis*）も意味し，Fianarantsoa（Betsil?）では「石」を後置した orom-bato（*sic*）がアスタコイデス属の一種（*A. granulimanus*）を区別する（CR)。

*buqaya（D)「ワニ」は voay ナイルワニ（*Crocodylus niloticus*, Flacourt（1658）は voaha と記し，より祖語形に近い）となるが，バントゥ祖語形 *-bamba「毒ヘビの一種，鱗」に由来するスワヒリ語の mamba「ワニ，毒ヘビの一種」という借用語も用いられる（Dahl 1988)。

そのほか，(D）は *zambuqara[q] クジラを掲げ，dambuhala?（Tagalog): zambuara (Ngaju-Dayak): lamboara (MLG)「魚の一種」を変化例として示す。Malay の jambuara もこれらに対応するが，jambuara は lambur「大クラゲ」のシノニムであるとともに想像上の奇怪異形の魚といわれる（武富 1942)。Tagalog ではクジラのほか「海の怪物」を意味するし，古ジャワ語の lembora/lembwara は‘zeemonster’（Juynboll 1923）を

意味するから，航海者の間で伝説的なシーサーペントのことと考えて間違いない。マダガスカルの lamboara は lambo-harano（*sic*）「ジュゴン＝水の猪」であるという説が紹介されているが（Blench 2006），この説は Tagalog, Malay などとの比較が無視されている。なお，クジラの総称は Malay, Bidayuh などで paus，Kelantan Malay で paoh であるが，PNN *pahus はマダガスカル諸方言には伝播しなかったようである。いずれにせよ，（D）や Adelaar（2006）のようにクジラと特定し得るような何の証拠もない。現在，マダガスカルでジュゴンは taha と呼ばれるが，語源は明らかでない。また希少生物としての保護がすでに1930年代から訴えられている（P）。

最後に Ma’anyan 起源の言葉として，puja 甲殻類が foza サワガニ（Flacourt（1658）は fouza と記し，釣り餌用に捕獲する）に変化している例がある（Dahl 1951）。

Matin-delany toa *toho*: ary matin-tanany toa *foza*.（Houlder 1960）「ハゼは舌ゆえ，サワガニは脚ゆえ（釣られ）死ぬ＝無而七癖」。

5　むすび

魚名のデータから判断するかぎり，インドネシアのジャワ海周辺の島じまの言語を同系とする局地的な対応例，とくにカリマンタン，スラウェシ，アンボン，ジャワの言語との対応が目立つ。またジャワ海に点在する漂海民族 Bajo（スラウェシ島南部，マルク諸島北部）/Bajau（小スンダ列島）もかなり含まれる。インドネシアでは，これらの島じまを総称してヌサンタラ（Nusantara「島嶼，群島」）と呼ぶ。魚名については「ヌサンタラ諸語」とマダガスカルの言語（方言）との対応例が多く，マライ・ポリネシア祖語形と大バリト祖語形の中間レベルに位置づけ得る「ヌサンタラ祖語形」（PNN）が多く存在することになる。それは，本論56項目の魚種のうち40項目が PNN に属することからも指摘することができる。ただし，34）は転用例である。PNN には Bajo/Bajau の魚名が02），09），12），14），20），23），39），41）に含まれる。とくに，09），20）は Bajo/Bajau にのみ現れ，どのような過程でマダガスカルにもたらされたのかは不明であるが，Vezo 方言にのみ見出される点が興味深い。ただし，語彙全体として見れば，Bajo/Bajau の言葉が Vezo 方言にとくに顕著に維持されているというわけでもない。したがって，マダガスカルの Vezo の出自が Bajo/Bajau であるという仮説の強力な証拠とはならない。これは，マダガスカルの民族集団の出自がインドネシアの特定の民族集団とただちに対応するものではないことと関連する。また PNN が魚名以外に語彙全体のなかで占める状態についても，さらに検証する必要がある。

Ma’anyan はカリマンタン島東南部で焼畑農耕を営む陸稲栽培民族である。その西側にはカリマンタン第二の大河であるバリト川が流れ，淡水魚についての民俗知識も豊富であったことは想像に難くない。本論56項目のうち，沿岸，汽水域から淡水に生息する

魚種は17項目にのぼる。このうち，52)，53)，54)，56）を除く12項目，すなわち01)，06)，10)，14)，16)，26)，31)，34)，35)，38)，42)，48）がマダガスカルにおいて海水魚へと意味変化したことになる。このうちの半数（6項目）がコイ科である。これはもっとも初期の渡来集団が内陸部に居住する民族であったことと無関係ではない。逆に，もと海水魚がマダガスカルで淡水魚に意味変化した例は08)，12)，55）の3例に過ぎない。

次に祖語形からみたマダガスカルの魚名の特徴についてまとめる。

① 同じ魚種を指すのにマダガスカルの方言間で語源の違いが存在する。例えば，ハマギギは06）Betsmisaraka 方言と21）Sakalava 方言，ホシギスは07）Betsimisaraka 方言と15）Sakalava 方言・Vezo 方言，ヘダイは02）Antankarana 方言・Antanosy 方言・Vezo 方言と38）Sakalava 方言で由来する祖語形が異なる。

② 祖語形で異なる魚種がマダガスカルの方言で同じ魚種を指す。例えば，ヒメツバメウオは35）Betsimisaraka 方言と41）Sakalava 方言・Vezo 方言の場合である。さらにもう一つのタイプとして，

③ 同じ祖語形がマダガスカルの方言間で異なる魚種を指す。例えば，23）フエフキダイ科は Vezo 方言と Sakalava 方言で異なる魚種を指す。08）ニシン科は Sakalava 方言で維持されるが，Betsimisaraka 方言でベドティア属を指す。また46）レイオカシス属はウロハゼ属，カワアナゴ属へと分岐する。

さらに魚名の語形の特徴として，接頭辞 a- を伴うことが多い。この接頭辞はオーストロネシア語族系の受動態の接頭辞 *a-（Dahl 1951）とは別ものであろう。現在，その機能は不明であるが，バントゥ語族系のクラス接頭辞の可能性がある。ただし，バントゥ祖語形の *a- は家畜に対して付き，その原機能はマダガスカル諸方言で維持されていない（Dahl 1988)。(Ki）の魚名見出し約410項目を単純計算しても，a- で始まる見出しが100項目に達する。接頭辞 a- は，a-kiho/an-kiho サメのように鼻音を伴わない左項の例のほか，鼻音前出形となって am-/an-/ang- に変化している例が多数ある。また方言間（同じ方言内）で30）の a-lovo/lovo マハタ属のほかにも，am-bariaka/bariaka ミナミクロサギ，an-kao/kikao ギンガメアジ属，an-kavy/kavy カワアナゴ属の一種，an-ketraketra/ketraketra セイタカヒイラギ，am-pirina/pirina カダヤシ（蚊絶やし)，a-robo/robo ソトイワシ，an-tofoka/tofoka ボラ属の一種，an-triotrioka/triotrioka ギンガメアジ属，an-tseraka/tseraka ホシザヨリなどの右項のように a- を伴わない形も見出される（Ki, BB)。ただし，33）a-malona に対する malona, 38）an-tsanga に対する tsanga という形は知られない。本論の例から指摘すれば，05)（Sakalava 方言)，12)，14)，20)，26)，52)，53）のようにたとえ接頭辞 a- が顕現していなくとも鼻音代償を含む潜在形も多い。これは形態音韻論的な現象である。魚名に限っても，Adelaar（2006）

のように祖語形からの子音の多重対応を解釈するため，十分な歴史的文化史的裏付けのないままインドネシア諸語やバントゥ諸語の借用語説によって牽強付会する必要はない。具体例で示せば，MLG の例が少ないため Sakalava 方言の例でみると，PAN *k は祖語継承音で h，借用語音で h/k になるという解釈から，25）hinta が前者，26）koana（前鼻音化潜在形）が後者に相当する。すなわち，祖語形のクロホシマンジュウダイ属が故地から維持され，淡水魚のウロハゼ属がのちに借用されたという解釈は民族移動史とも矛盾する。

文　献

Abinal, A. et V. Malzac

1888　*Dictionnaire malgache-français*. Paris: Maritimes et d'Outre-Mer.

Academia Sinica, Taipei, Taiwan

2010　Fish Base（http://www.fishbase.org/search.php）.

Adelaar, K. A.

2006　The Indonesian Migrations to Madagascar: Making Sense of the Multidisciplinary Evidence（http://www.santafe.edu/events/workshops/images/6/6d/IndonesianMigrations.pdf）.

Avery, A. C.

1950　*Fish Processing Handbook for the Philippines*. Washington: United States Government Printing Office.

Barnett, G. L.

1978　Handbook for the Collection of Fish Names in Pacific Languages. *Pacific Linguistics* D-14.

Bauchot, M. -L. et G. Bianchi

1984　（BB）*Guide des poissons commerciaux de Madagascar*. Rome: Organisation des Nations Unies pour l'Alimentaion et l'Agriculture.

Beaujard, P.

1998　（Be）*Dictionnaire malgache-français, dialecte Tañala, sud-est de Madagascar, avec recherches étymologiques*. Paris: L'Harmattan.

Blench, R.

2006　The Austronesians in Madagascar and on the East African Coast: Surveying the Linguistic Evidence for Domestic and Translocated Animals（http://www.sil.org/asia/philippines/ical/papers/html）.

Blust, R.

1970　（B1970）Proto-Austronesian Addenda. *Oceanic Linguistics* 9(2): 104-162.

1980-1989　（B1980, B1986, B1989）Austronesian Etymologies. *Oceanic Linguistics* 19(1-2): 1-181, 22-23(1-2): 29-149, 25(1-2): 1-123, 28(2): 111-180.

1984-1985　（B1984-1985）　The Austronesian Homeland : a Linguistic Perspective. *Asian*

Perspectives 26(1): 45–67.
Boissard, P.
1983 *Cuisine malgache cuisine creole*. n.p.: Editions de la Librairie de Madagascar.
Butler, R.
1994–2006 (Bu) List of Freshwater Fishes for Indonesia (http://fish.mongabay.com/data/Indonesia.htm), for Madagascar (http://fish.mongabay.com/data/Madagascar.htm), for Malaysia (http://fish.mongabay.com/data/Malaysia.htm), and for the Philippines (http://fish. mongabay.com/data/Philippines.htm).
Cense, A. A.
1979 (C) *Makassaars-Nederlands woordenboek* (Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde) 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
Collart, A. et A. Rabelahatra
1977 (CR) Annexe V : principales familles des poissons ayant une réelle importance économique espèces d'eaux douces & marines à caractère euryhalin. *Programme pour le recueil des données statistiques de base sur les Pêches Continentales (Production & Commercialisation)*. Antananarivo: Organisation des Nations Unies pour l'Alimentaion et l'Agriculture.
Dahl, O. C.
1951 *Malgache et Maanjan: une comparaison linguistique*. Oslo: Egede-Instituttet.
1988 Bantu Substratum in Malagasy. *Etudes Océan Indien* 9: 91–132.
Dempwolff, O.
1938 (D) Austronesisches Wörterverzeichnis. Vergleichende Lautlehre des austronesischen Wortschatzes Ⅲ. *Zeitschrift für Eingeborenen-Sprachen* 19.
Dyen, I.
1971 The Austronesian Languages and Proto-Austronesian. In T. A. Sebeok (ed.) *Current Trends in Linguistics* 8, pp. 5–54. The Hague: Mouton.
Flacourt, É. de
1658 Histoire de la grande isle Madagascar. Paris: Chez Pierre L'Amy.
Elli, Luigi P.
1988 (E) *Dizionario Bara-Italiano*. Fianatantsoa: Ambozontany.
Geraghty, P.
1994 (G) Proto-Central Pacific Fish Names. *Pacific Linguistics* C–127: 141–169.
Hardeland, A.
1859 (Ha) *Dajacksch-Deutsches Wörterbuch*. Amsterdam: Frederik Muller.
Helfman, G. S. and J. E. Randall
1973 (HR) Palauan Fish Names. *Pacific Science* 27(2): 136–153.
Herre, A. W. and A. F. Umali
1948 (HU) *English and Local Common Names of Philippine Fishes*. Washington: United States Government Printing Office.
Houlder, J. A.
1960 *Ohabolana ou proverbes malgaches*. Tananarive: Imprimerie Luthérienne.

Hudson, A. B.
1967 (Hu) The Barito Isolects of Borneo: A Classsification Based on Comparative Reconstruction and Lexicostatistics. *Data Paper* 68. Ithaca: Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University.
飯田卓
2008 『海を生きる技術と知識の民族誌 ―― マダガスカル魚撈社会の生態人類学』京都：世界思想社。
2008 (I)「付録６　アンパシラヴァ村での漁獲調査中に捕獲された魚種」『海を生きる技術と知識の民族誌 ―― マダガスカル魚撈社会の生態人類学』pp.318–320, 京都：世界思想社。
Inger, R. F. and P. K. Chin
1962 (IC) The Fresh-water Fishes of North Borneo. *Fieldiana Zoology* 45. Chicago: Chicago Natural History Museum.
Juynboll, H. H.
1923 *Oudjavaansch-Nederlandsche woordenlijst*. Lieden: E. J. Brill.
Kami, H. T., I. I. Ikehara and P. D. Francisco
1968 (KIF) Check-list of Guam Fishes. *Micronesica* 4(1): 95–131.
Kiener, A.
1961 (Ki) Poissons malgaches: liste des noms malgaches de poissons d'eau douce, d'eau saumâtres et d'espèces euryhalines (2–3). *Bulletin Madagascar* 179: 311–359; 180: 404–435; 181: 492–527.
Koechlin, B.
1975 (Ko) *Les Vezo du sud-ouest de Madagascar: contribution à l'étude de l'éco-système de semi-nomades marins*. Paris/La Haye: Mouton.
Kottelat, M., A. J. Whitten, S. N. Kartikasari and S. Wirjoatmodjo
1993 *Freshwater Fishes of Western Indonesia and Sulawesi*. Hong Kong: Periplus Editions.
小山直樹
2009 『マダガスカル島 ―― 西インド洋地域研究入門』神奈川：東海大学出版会。
MacKinnon, K., G. Hatta, H. Halim and A. Mangalik
1996 *The Ecology of Kalimantan*. Hong Kong: Periplus Editions.
Maxwell, C. N.
1921 (M) Malayan Fishes. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society* 84: 181–280.
Nais, W.
1988 (N) *Daya Bidayuh-English Dictionary*. Kuching: Persatuan Kesusasteraan Sarawak.
ノルマン，J. R.（グリーンウッド，P. H. 校訂）
1970 定訳『魚の博物学』黒沼勝造・上野達治共訳，東京：社会思想社。
Petit, G.
1930 (P) *L'industrie des pêches à Madagascar*. Paris: Société d'Editions Géographiques, Maritimes et Coloniales.
Poirot, G.
n.d. Plan du dictionnaire vezo-français (http://www.langues-africaines.com/VEZO/4_dictionnaire_vezo/B.htm).

Richards, A.
1981 (R) *An Iban-English Dictionary*. Oxford: Clarendon press.
Richardson, J.
1885 *A new Malagasy-English Dictionary*. Antananarivo: The London Missionary Society.
Ruud, J.
1960 *Taboo: A Study of Malagasy Customs and Beliefs*. Oslo: Oslo University Press.
崎山理
1980 「オーストロネシア民族と魚」『民博通信』9：41–49。
n.d. (S) 崎山フィールドノート (Toliara, Madagascar: Vezo方言, Mahajanga, Madagascar: Sakalava 方言, Sangkuwang, Maluku, Indonesia: Bajo)。
Saunders, A.
2007 Madagascar's Endangered Fishes Homepage (http://www.madagascarfish.org/ichthyofauna/html).
Schroeder, R. E.
1980 (Sch) *Philippine Shore Fishes of the Western Sulu Sea*. Manila: National Media Production Center.
Schuster, W. H. and R. R. Djajadiredja
1951 (SD) *Local Common Names of Indonesian fishes*. (The Ministry of Agriculture of Indonesia, Laboratory for Inland Fisheries) Bandung/'s-Gravenhage: W. van Hoeve.
Scott, J. S.
1959 (Sco) *An Introduction to the Sea Fishes of Malaya*. Kuala Lumpur: Government Printer.
高木正人
1970 『全日本及び周辺地域に於ける魚の地方名』佐賀：私家版。
武富正一
1942 『馬来語大辭典』東京：旺文社。
Thomas-Fattier, D.
1982 (TF) *Le dialecte Sakalava du nord-ouest de Madagascar*. Paris: Centre National de la Recherche Scientifique.
Verheijen, J. A. J.
1986 (V) The Sama/Bajau Language in the Lesser Sunda Islands. *Pacific Linguistics* D–70.
Yamada, Y. and Nik Abdul Malek Faisal
1999 *Fish Names in Kota Bharu (Kelantan Malaysia)*. Himeji: Himeji Dokkyo University.
Zorc, R. D.
1995 (Z) A glossary of Austronesian Reconstructions. In D. T. Tryon (ed.) *Comparative Austronesian Dictionary: An Introduction to Austronesian studies*. Part 1: Fascicle 2, pp. 1105–1197. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
Zorc, R. D. and M. Charles
1971 *Proto-Philippine Finder List*. Ithaca: Cornell Typescript/Xerox.